

自己点検・評価について

① プログラムの自己点検・評価を行う体制 地域創生学部 数理・データサイエンス教育検討委員会(応用基礎)

(責任者名) 重安 哲也
 (役職名) 地域創生学部 数理・データサイエンス教育検討委員会(応用基礎)委員長

② 自己点検・評価体制における意見等

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学内からの視点	
プログラムの履修・修得状況	「データ分析とプログラミング」および「人工知能応用基礎論」は、いずれも地域創生学部の全学生が履修可能な学部共通科目(選択)として、令和7年度入学者以降を対象に新設した科目である。 令和7年度における履修者数は、「データ分析とプログラミング」が28名、「人工知能応用基礎論」が19名であり、両科目とも単位取得率は100%と良好な履修・修得状況となっている。 一方で、履修者数は今後さらに増加が見込まれることから、履修機会の拡充に向けて、教室配置等の環境整備について検討を行う予定である。
学修成果	本学では、毎学期末に「学生による授業評価・授業改善のためのアンケート」を実施している。 令和7年度における「データ分析とプログラミング」および「人工知能応用基礎論」のアンケート回収率はそれぞれ64.3%、42.1%であった。 「この授業の目標とする力(知識や技能など)が身に付くか」を問う設問において、全ての回答者が「そう思う(強くそう思うを含む)」と回答しており、「総合的に判断して、この授業に満足しているか」についても同様に高い評価が得られている。 また、両科目とも単位取得率は100%であり、これらの結果から、受講学生は概ね学修目標を達成していると判断できる。
学生アンケート等を通じた学生の内容の理解度	毎学期末に実施している「学生による授業評価・授業改善のためのアンケート」における令和7年度の「データ分析とプログラミング」および「人工知能応用基礎論」の結果では、「この授業の課題の内容・量は適切である。」との設問に対し、全ての回答者が肯定的に回答している。 また、「授業時間外に取り組むべき課題が示されているか」に対しては、それぞれ83%、87%が肯定的に回答しており、適切な学修機会が提供されていることが確認できる。 さらに、「授業に集中し真剣に取り組んでいるか」に対しても全ての回答者が肯定的に回答していることから、学生の主体的な学修態度が形成されている。 これらの結果は、適切な課題設定および学修機会の提供を通じて、学生の授業内容に対する理解が促進されていることを示している。 今後は、これらの結果を踏まえ、より一層の理解度向上に向けた授業改善を継続的に実施する。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	令和7年度の「データ分析とプログラミング」および「人工知能応用基礎論」に対する授業評価・授業改善アンケートの結果では、両科目とも、「総合的に判断して、この授業に満足しているか」を問う設問に対し、全ての回答者が肯定的に回答している。 また、「学修活動に対して必要な支援を得ているか」に対しても、全ての回答者が肯定的に回答しており、学修環境に対する高い評価が得られている。 さらに、自由記述欄においては、授業内容の分かりやすさや演習の有用性に関する肯定的な意見が多く見られ、本授業の履修に対する満足感が確認されている。 これらの結果から、本プログラムは受講学生の満足度が高く、他の学生に対しても履修を推奨し得る教育内容であると評価できる。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	学部共通の選択科目として配置している「データ分析とプログラミング」および「人工知能応用基礎論」については、令和7年度において他の選択科目と時間割が重複していたことから、情報分野以外に所属する学生の履修登録が少ない状況であった。 この課題に対して、令和8年度は他科目との重複を可能な限り回避した時間帯への配置変更を行い、履修機会の改善を図った。 これにより、情報分野以外の学生にとっても履修しやすい環境の整備が進んでいる。 今後は、履修状況の分析に基づき、履修ガイダンスの充実や履修モデルの提示などの履修促進施策を併せて実施し、履修者数および履修率のさらなる向上を図る。

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	<p>本教育プログラムは令和7年度入学者以降を対象として新設されたものであり、現時点では修了者は在学中であるため、卒業生の進路や企業等からの評価についての実績は蓄積途上にある。</p> <p>一方で、本学においては、情報分野以外に所属する学生であっても情報通信業に就職する卒業生が一定数存在していることが確認されている。</p> <p>また、近年では情報通信業に限らず、多くの企業においてDX人材の育成・確保が求められていることから、本教育プログラムにより修得されるデジタル知識・技能に対する社会的ニーズは高いと考えられる。</p> <p>今後は、卒業生の進路状況や企業からの評価について継続的に把握し、本教育プログラムの改善に活用していく予定である。</p>
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	<p>近年、産業界においては、データに基づく意思決定やAIの活用を担う人材の育成が強く求められており、専門分野に加えてデータサイエンスを活用できる人材へのニーズが高まっている。</p> <p>本学では、情報分野の学生を対象としてIT企業を学内に招き、半日間のワークショップを共同で実施しており、企業担当者からは本学学生の基礎的な情報処理能力や課題解決能力について高い評価を得ている。</p> <p>これらの評価は、本学における情報教育の有効性を示すものであり、本教育プログラムにおいても同様の能力の育成を図ることで、産業界の要請に対応した教育内容となっている。</p> <p>今後は、企業等からの意見を継続的に収集し、教育内容や教育手法の改善に反映することで、より実践的な教育プログラムの充実を図る。</p>
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	<p>本教育プログラムでは、数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」および「学ぶことの意義」を理解させるために、実データを用いた演習や身近な課題を題材とした授業を実施している。</p> <p>これにより、学生がデータ分析やAI技術の有用性を実感しながら主体的に学修に取り組むことを促している。</p> <p>また、これらの知識や技能が社会や将来の進路においてどのように活用されるかを示すことで、学修意欲の向上を図っている。</p>
<p>内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること</p> <p>※社会の変化や生成AI等の技術の発展を踏まえて教育内容を継続的に見直すなど、より教育効果の高まる授業内容・方法とするための取組や仕組みについても該当があれば記載</p>	<p>本教育プログラムでは、内容および水準を維持・向上しつつ、学生にとって分かりやすい授業を実現するため、基礎から応用へと段階的に理解を深める授業設計を行っている。</p> <p>また、「データ分析とプログラミング」および「人工知能応用基礎論」の両科目において、数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアムが策定したモデルカリキュラムに準拠した教科書を共通して採用することで、教育内容の体系性および水準の妥当性を確保している。</p> <p>これにより、学生は一貫した枠組みの中で数理・データサイエンス・AIの知識を理解することが可能となり、学修内容の定着および理解の深化を促進している。</p> <p>さらに、社会の変化や生成AI等の技術動向を踏まえ、授業内容や教材の見直しを適宜行うとともに、学生アンケート等の結果を基に継続的な授業改善を実施することで、教育効果の向上に取り組んでいる。</p>